

## 西洋建築事始め —棟梁たちの擬洋風建築 I—

山村 賢治(建築史学会員)

### 1. はじめに

安政5年(1858)幕府はアメリカ、イギリス、オランダ、フランス、ロシアの諸国と修好通商条約を締結して開国に踏み切った。翌年から神奈川(横浜)、長崎、兵庫(神戸)などの開港場に居留地が設けられることになり、ここに本格的な西欧建築が導入される場ができて、日本の近代建築の歴史が本格的に始まるのである。

来日した外国人は、当初は付近の寺院や民家などに仮泊していたが、居留地建設の進捗に伴い商館や倉庫、あるいは住宅などを建てるようになる。その最初期の代表的な住宅の例が長崎のグラバー邸(文久3年・1863)であるが、この木造平屋、日本瓦葺きの簡素な住宅は、イギリス人貿易商トーマス・グラバーが自ら簡単な間取り図程度の設計図と、大まかな寸法、室内の仕上げなどを指定して、それに基づいて地元日本人棟梁が建てたものである。



旧グラバー邸(長崎)

居留地の整備が進むと西洋式街区ができ、都市としての、緑地帯のある道路、歩車道の分離、下水道の完備などといった都市計画は、当時の日本の都市とは大きな隔たりがあったが、そこに現出した“西洋”建築が現実と離れていればいるほど日本人の好奇心をかきたてるものであった。

その洋風の建築を模して、擬洋風建築という特異な一群の洋風建築が日本の各地に建てられるようになる。

### 2. 擬洋風建築の誕生

横浜や神戸の開港場に今まで見たこともない西洋館が現れると、日本の大工・棟梁は新しい建物を学ぼうと横浜に出掛けて外人に弟子入りする者から半日だけの見学で済ます者までいろいろ現われるが、彼らは初めて出会った西洋館の驚きをそれぞれの場に持ち帰り、自分の建物として表現していく。

現在各地に残る明治初期の西洋館の中に、コロニアルとも洋式工場とも違い、土のにおいと楽天性の混じった不思議な西洋館の一群が見出される。たとえば、松本の開智学校(M9)にはお寺のような車寄せが張り出し、エンジェルが舞い、屋根には塔が突き出す。山形の済生館(M12)は病院でありながら、なぜかドーナツ状の平面をとり、正面に建つ塔は一階が八角、二階一六角、三・四階は八角と、まるで積み木の塔に近い。山梨の春米(つきよね)学校(M9)の塔のてっぺんはシャチホコが逆立ちし、新潟運上所(M2)は伝統のナマコ壁に包まれながら正面には大きなアーチが口を開けている。こうした洋風とも和風ともつかない摩訶不思議な西洋館こそ草深い各地の大工棟梁が、日本に上陸したコロニアル建築との出会いの体験を無手勝流で表現したものにはほかならない。このユニークな形式のことを「擬洋風」と呼ぶ。洋風に擬(なぞら)えた建物という意味である。擬洋風は明治とともに始まり、10年前後にピークを迎え、20年前後に消えていくから、時代としては文明開化期とちょうど重なる。わずか20年の生命であったが、形式は三系統に分かれ、まず幕末から

明治初期にかけて、「木骨石造系擬洋風」が先行し、次いで「漆喰系擬洋風」が現れてピークを飾り、その後「下見板系擬洋風」に取って代わられる。木骨石造系というのは木造の表壁に石や平瓦を張るもので、実例としてはナマコ壁の新潟運上所がある。漆喰系は木造の表面を漆喰壁で包む伝統の左官技術によるもので、松本の開智学校が代表作となっている。下見板系は土壁に代えて下見板を張りペンキを塗ったものをさし、山形の済生館を代表とする。

### 3. 木骨石造系擬洋風の誕生

<元祖・清水喜助>

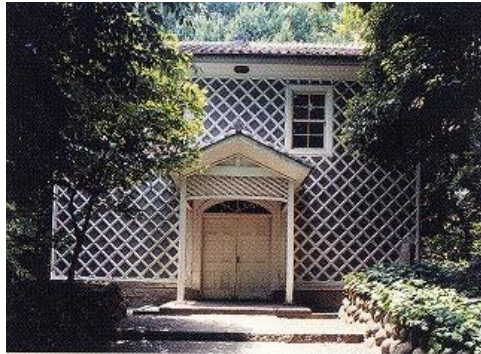
文化12年(1815)越中国砺波郡井波の商家に生れた大工の清七は、同郷のつてを頼って江戸に上り、神田新石町の大工棟梁清水喜助の徒弟となり、やがて働きを認められて娘と一緒に店を継ぐことになる。義父の喜助は経営の才にも恵まれ、幕府直轄の仕事に携わっていたことから苗字帯刀を許されるほどの人物で、清七はこうした幕府関係の普請に働かなかで江戸の美学や技術を身につけた。この父子は進取の気宇に富んでいたらしく、横浜が開港すると直ちに店を出し、清七が仕切った。しかし、父が横浜に向かうカゴの中で急逝したことから、清七が二代喜助となる。その後の喜助の活躍はめざましく、四人の幕府公認請負人の一人に選ばれ、公的な土木建築工事を独占的に手掛けるようになる。そうした活躍の中で喜助は見よう見真似で洋風建築の作り方を身に付けることになるが、チャンスとして大きかったのは当時横浜に建築事務所を構えていたアメリカ人技師ラファエル・P・ブリッジェンスとの出会いだ。喜助は、当時としては日本で一番洋風建築に詳しい大工棟梁となり、同様な立場であった高島嘉右衛門とともに手掛けた最初の仕事がナマコ壁のイギリス仮公使館(慶応2年・1866)であった。この大仕事をやり遂げる中で自分の

進むべき道に確信をもち、10年近い横浜での暮しで身に着けた<木骨石造><ヴェランダ><ナマコ壁><日本屋根>の四つを武器に江戸・東京に戻り、洋風建築の大作二つを世に問う。一つは築地ホテル館(M1)で、ブリッジェンスの基本設計に従い、実施設計と施工を喜助が受け持った。全体の姿はヴェランダとナマコ壁に塔を加えて構成されるが、ポイントは大きな建物の表面を黒と白のパターンで覆うナマコ壁にあった。もう一つは全て自分で手掛けた第一国立銀行(M5)。この仕事で喜助は、木骨石造、ヴェランダ、日本屋根を組み合わせ、とりわけ日本屋根をバネにして和様折衷の道を極めた。全体を見ると二階建て木骨石造のヴェランダコロニアル建築の上に日本のお城があぐらかいたような姿であり、細部を見ると和洋折衷は全てに及んでいる。江戸から名を変えた東京に出現したこの二作が日本の擬洋風建築の始点であり、文明開化の幕開けを告げる記念碑となった。全国の大工が見学を訪れ、各地に帰って新しい建物の作り方を広めていくが、地方への影響力という点では、ナマコ壁の築地ホテル館の方が木骨石造に日本屋根の第一国立銀行よりはるかに大きい。おそらく木骨石造にくらべナマコ壁擬洋風の方が技術的にも経済的にも作りやすかったのだろう。明治元年の築地ホテル館以後各地に広がり、警察署、学校などを生んでいくが、しかし生命は短く、擬洋風の中の少数派に終わっている。



旧新潟運上所(新潟市)

今に残る実例も乏しく、新潟運上所(M2)、慶応義塾三田演説館(M8)、伊豆の岩科学校(M13)の三棟が伝わるにすぎない。



慶応義塾三田演説館(東京)

#### < 林忠恕と木造官庁建築 >

開港場ヨコハマから奇妙な形の西洋館の作り方を持ち出した大工棟梁は、清水喜助だけではなく、一步遅れてもう一人いる。林忠恕(ただひろ)である。珍しい経歴の人物で、天保6年(1835)伊勢に生れ、まず鍛冶屋になったが、木挽きに転じ、さらに大工となる。幕末(慶応1頃)開港場ヨコハマに行き、ブリッジェンスと出会って生涯の方向が定まった。

いつ“ブリッジェンス党”に加わったのかは定かではないが、イギリス仮公使館の工事に参加し、高島嘉右衛門や清水喜助と一緒に働いた可能性は高い。ブリッジェンスの許で洋風建築を覚えた林忠恕は、明治に入って大蔵省営繕寮に雇われ(M4)、以後明治26年に病没するまで新政府の建築技術者として働くことになる。営繕寮には旧幕時代に洋式工場建設に参加した作事方出身者も多かったのに、町場の職人あがり雇われ、やがて作事方出身者を抜くようになるのは、ブリッジェンスの許でコロニアル建築を半歩越えるやや本格的な洋風建築を学んだ体験が大きく物をいったにちがいない。当時、大蔵省営繕寮は政府の主な建物を一手ににぎり、トップにはウォートルスが座っていたが、その下の日本人技術者の筆頭に躍り出たのが林忠

恕である。ウォートルスが煉瓦や石の本格的建築を手掛ける一方、林は木造の簡便な官庁建築をまかされ、大蔵省(M7)、内務省(M7)、神戸東税関役所(M6)、駅通寮(M7)、大審院(M10)など、次々に手掛けていく。林はブリッジェンスや清水喜助のように木骨石造は使わず、かといって当時の居留地の簡便なコロニアル建築のように伝統の漆喰壁にも頼らず、その中間を行き、壁の普通のところには漆喰を塗り、アーチや建物の角のコーナーストーン(隅石)といった目立つところのみ石を貼る。ブリッジェンスに学んだ木骨石造の省略形と言えよう。清水のいかにも擬洋風っぽいまがましい作風にくらべ、林の作品は本当の西洋館と擬洋風のどっちつかずのもので、建築表現としては面白みに欠けるが、中央官庁の建物であるだけに、各地への影響力は少なくなかった。現存の擬洋風の地方官庁のうち、三重県庁舎(M12清水義八)と新潟県会議事堂(M16星野総四郎)に例が見られる。幕末の開港場に上陸したコロニアル建築は、横浜において伝統との折衷化という東アジアの居留地には珍しい現象を見せ、この傾向は生れたばかりの東京に持ち出されて定着し、擬洋風建築の誕生となった。これら“木骨石造系”の一群が日本の擬洋風の先陣を切ったのである。島根県内の事例として松江で最初の擬洋風とされる田野家住宅(旧田野病院M4)が考えられるが、様式的には次世代の漆喰系に分類すべきであろう。

#### < 参考文献 >

- 日本近代建築の歴史 村松貞次郎著(岩波現代文庫)
- 日本の近代建築 上下 藤森照信著(岩波新書)
- 日本近代建築大全 米山勇 伊東隆之(講談社)
- 日本の建築 8 日本建築学会編(新建築社)
- 島根県の近代化遺産 島根県教育庁文化財課編
- しまねの家-住まいと町なみ-(社)島根県建築士会編